

松 陰

談話室

第 2 号 1981.10

図書館員の資質

文学部教授 草 野 正 名

いわゆる戦後、大学図書館の機能にとって教育と研究とは多種多様化し、図書資料の集蔵は激増した。このような戦後の時代的転換期のもとで大学図書館は、過去の研究資料を含め、最新の学術文献、定期刊行物、さらに海外の学術研究資料などの収集・整備に大きな努力を傾けてきた。

図書館学の分野では図書館員の資質として専攻分野の知識、外国語の知識、図書館学の知識（分類・目録・書誌・抄録・索引など）などの必要性が強調され、多くの図書館員が研修などに積極的に参加し、その教育・学術の驚異的な進展の動向に対応してきた。

そして日本の大学図書館は、各種の参考・主題図書、学術雑誌、書誌類の整備拡充、指定図書・予約図書制度など、貸出・開架式の積極化で、世界各国の大学図書館に比しても刮目すべき発展を続けてきた。

大学図書館は、いわば学術研究・教育を志向する教員と学生、それに図書とを図書館員が結合し成長していく有機体とも云える。

戦後、ことに自然科学系の学部・研究所などの専門図書館の発展が目ざましく、そうしたことが学内での中央図書館による集中管理方式と分散管理方式との可否をめぐる議論を生み、「大学図書館改善要項」の中では、集中管理方式の示唆をみ

るに至った。

大学図書館の多様な機能化につれて、いつしか研究者と図書館資料の間を橋渡しする参考司書・ドキュメンタリストによる高度の専門的能力が要求され、そうしたことが新しい近代的大学図書館建設の動向にも強い刺激を与えた。

それに昨今、大学図書館での情報管理思想の導入は、研究者のために学術情報の蓄積と検索を容易にすべき各種手段の進展を生みつつある。研究者と研究室と図書館との間の有機的な一体化がますます強調され、各種多様な学術研究図書資料の充実整備はもとより、検索資料としての自他館の蔵書目録、解題書誌、主題・著者書誌、抄録・索引類の作成整備拡充にと図書館員への期待は果しない。研究者からは新着の専門誌の目次を複写して配布するコンテンツ・シート・サービス contents sheet service までも要求される。

ことに情報管理思想は、図書館業務の機械化を促進せしめる要因となって、今日では電子工学的な情報処理、自動制御機能を備えた装置などの利用段階へと進みつつあり、これらも今日まで蓄積してきた図書館員の専門的能力によって、やがて達成されていくものと期待されている。

かくて図書館員の資質は、ますます多様化が要求され、専門化してゆくものとみられている。



図書館における視聴覚ホールと響き

——西洋音楽と建築——



●はじめに

音楽芸術のもつ、あの優雅で気品のある詩的な輝き、たとえ人びとのつぶやき声や演奏家が発する騒音でさえも美しく天国的な和音となつて人を感動させる響き。

われわれの身近にある大学図書館の視聴覚ホールで、こんなに美しい音楽を鑑賞することは不可能である。レコード演奏で技術的に可能であっても、音の自然な性質を生かしたホールの設計がしていないために音楽が美しく響かないのである。数世紀も前からヨーロッパでは人びとが正しい音楽の響きを鑑賞していたと云うのに、日本ではどここの図書館の視聴覚ホールでもそれを鑑賞することができないのはなぜだろうか。

その原因について、次号と2回にわたって考察してみたい。

●ヨーロッパ音楽の文化的環境

音楽芸術ほどその時代と地域の文化的環境に影響され易い芸術はまれである。また、音楽ほど人びとの善意によって誤解され易い芸術もまれである。初めて耳にする言語と楽器によって演奏される音楽であっても、われわれは直ちにその美的内容を感じることができるのは音楽のもつ特権である。ヨーロッパ音楽が異なった文化的環境の中で、それなりの美的認識を得られるのは、音楽のもつ天性なのかもしれない。けれど、もしもその

音楽が文学的内容を含み、美学的思想を伝えようとしているならば、われわれはその芸術作品の学術的内容を含めた文化的環境を知らねばならない義務がある。

●音楽と建築

ヨーロッパ音楽の歴史は、バロック時代にその起源を求めることができる。無論それ以前のルネッサンス期において音楽史の概念形成の基礎が置かれているとはいえ、われわれが比較的容易に接することができるのは、400年から500年前からの音楽である。

バロック時代の音楽はどんな文化的環境に置かれていたのだろうか。

1506年着工のローマのサン・ピエトロ大聖堂は、すべてのバロック建築家にとって古代建築と並んで最高の研究対象であり続けた。

(中略) バロック様式はローマに起こった。この命題は、まさに様式史の核心的命題となっている。

フーバラ・エー・ハッピ『バロック・ロココ美術』
(グラフィック社) P.15-16

音楽の歴史をたどって行くと、古代建築からルネッサンス期を経てバロック建築へと成長していった建築史と同じ歩み方をしていることがわかる。ヨーロッパ音楽は古代建築の内に誕生し、ルネッサンス期に成長して、バロック建築の内に開花したといえないだろうか。この間の事情を人びとの日常生活の出会いのうちに見てみよう。

●音楽ホールとしての響き

ルーブル美術館は大理石が敷きつめられていて、足早に歩くと大きな音が室内一ぱいに響きわたってしまうといわれている。美術作品を鑑賞しに訪れる人びとは、つま先だって歩かなければならない。そのことが身体の緊張を生みだし芸術に接する魂の緊張を創りだす。響きのある空間は自ら積極的に静寂を創りだそうと心構える。

芸術や学問研究のみなもとが、自ら参加することだとするならば、われわれの大学図書館は技術的な情報を利用者を与える場所ではあっても、われわれに語りかけてくれる“あるもの”を、こちらのうちに感受できる場所ではない。吸音板を張りめぐらした室内は与えられる静寂ではあっても、自ら創造する静寂ではない。安易な理解はできても、自ら創造する精神の緊張を生みだしてくれはしない。

古代芸術のあらゆる様式を飲み込んだバロック建築は、高くて曲線的様式の天井、大理石の広々とした室内、美しい色彩と装飾の光と影。彼らはここで美しい発声法を身につけ、自分の内心に目を向けることを学ぶ。

オックスフォード大学のクライスト・チャーチの礼拝堂は、今は食堂となっていて、多勢の教授や学生が集まって食事をしながら会話が交えられるが、決して騒がしくない。それどころか、彼等の会話や食器の音が高い天井に美しく響いて、こちらの充実感を覚えるそうである。

●日本楽器と西洋楽器のちがい

日本の音楽と西洋音楽の違いが、建築様式の違いにあることはよく知られていることである。障子、襖、畳、低い天井の薄い木の板と土の壁。おまけに狭い部屋。このような部屋では、三味線、尺八、琵琶、琴、そして新内、長唄、義太夫、浄

瑠璃等の独特な節回しがよく響く。

これに対して、ヨーロッパ音楽が育ってきた建築様式は、様々な型や大きさの石を組合せた石積みみの構造と高い天井、磨きぬかれた石の床と広い室内。ここに生まれ育った楽器の響きや発声の仕方が日本とは異なるのは当然である。

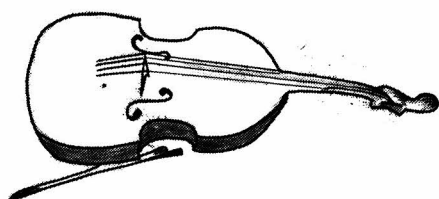
西洋の楽器の中でも最も代表的な楽器の一族である弦楽器について調べてみよう。

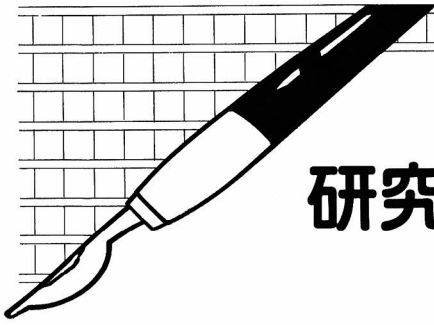
ヴァイオリンは弦楽器の中でも最もポピュラーな楽器であるが、ティティアン、ミケランジェロ、ラファエルのいたルネッサンス期にアンドレ・アマーティによって完成された。1560年頃である。その後約2世紀の間に北イタリアの小さな町クレモナで製作されたヴァイオリンは、その後ほとんど改良される必要がなく、アマーティ家の子孫たちによって世界中に送り届けられた。その完成度の高さは世界の楽器の中でもぬきんでている。しかも、400年も昔というのだから驚く。

先日、あるヴァイオリニストに名器だと自慢している楽器を持参して貰い、和室と洋室での音色の違いを比較テストした。和室は障子が2面と京壁が2面の8畳の部屋であり、洋室は天井を4.45mと高くした52.8㎡の音楽室である。

その結果は、各音程でのダイナミック・レンジの広さ。音の美しさと気品の高さ。凡ゆる音域における均等とバランス。音域全体のエネルギー感と音量。音の臨場感と繊細さ。音響物理学と人間の聴感上の特性を基礎にして設計した音楽室と、和室での音質の違いをあらためて思い知らされた。

次回は、視聴覚ホールを設計する場合の音響処理の具体的な施工例と、音楽上の音響物理学的性質と聴感上の問題点として、天井を高くするとなぜ音質がよくなるか等を、私の体験を通して書きたいと思う。(つづく)





わたしの研究生活 第2回

研究のブラック・ボックス

政経学部教授 山 田 昭 二

研究生活は情報の入力を知識の出力に変える作業である。その働きは外部からは明らかでない。この点は「ブラック・ボックス」すなわち密閉された電子装置のからくりと相通じる。研究のブラック・ボックスは記憶力や機械的な情報処理の性能においては電子装置には到底かなわない。しかし直観的判断や創造的発想など、機械にはない感性能力を持つ。

わたしは古代民族の移動と貿易の起源という極めて古い問題と取り組んでいる。先史時代以来伝わる情報とアイデアのひらめきを中心に、貿易起源の謎の究明を目指している。わたしのブラック・ボックスの情報処理のメカニズムの一部を紹介する前に、情報と知識についての私見を述べたい。

1. 情報と知識

わたしたちは多くの問題に追われながら生活している。問題には大別して解答を求めるものと解決を求めるものの2種類がある。例えば数学や物理の問題の多くは解答を求める問題であるが、政治、経済や社会の問題は解決を要求する。英語では問題を question と problem の2様に使い分けている。数学の問題を解く場合は情報よりも知識がものをいう。知識は学習や研究によって得るもので、正確さが知識の価値の中心となる。

情報が知識と区別される点は、情報は暗示性、又は秘密性を持つことであろう。情報の価値は専らその有益性、すなわち、ある情報が特定の問題の解決に役立つかどうかによって決まる。四則の

問題の答は小学の知識で得られる。その知識はあまりにも初歩的であり、暗示性を持たないので、情報としての価値は零に等しい。

情報の価値は情報を使う人の問題意識によって決まる。ある人にとりあまり価値のない情報でも別の人には大きな価値を持つことがある。情報の価値を測る尺度は相対的で、各人がそれぞれ独自の物差しを持つといえよう。これに対し知識を測る尺度は普遍的である。

2. 情報をとらえるアンテナ

問題解決の第一のステップは情報を集める作業である。情報はブラック・ボックスの外にあるので、情報をとらえるアンテナを外面向けて伸ばさなければならない。しかし情報の必要性はブラック・ボックスの内面の問題意識によって誘発される。アンテナは内面に向ける必要もある。外面のアンテナは情報源を、内面のアンテナは問題の本質を探るものということができる。この二方面に伸びるアンテナは植物の枝と根のように双方バランスを保ちつつ成長すべきもので、一方だけが伸びても効果は上がらない。

内面のアンテナ

問題の本質を追及するアンテナの仕事を逐次述べよう。まず問題をいくつかの要素に分析する。大きい問題を小さい問題の集まりに変え、小さい問題を個別に解決するようにわたしは心掛けている。時間が無い場合は全体よりも一部を選んでそ

の解決を計る方が賢明である。さらに自分が解決すべき問題は具体的に何であるかを追及する。自分は何をいいたい。誰を納得させたい。どんな形式で問題を解決するか。これらの点を自問自答しつつ、問題意識を具体化、細分化していく。この内面のアンテナは情報の分類、整理の作業の基礎にもなる。

外面のアンテナ

外面のアンテナは求める情報がどこにあるかを知るのに役立つ。最も手近で一般的な情報源は辞書、百科辞典、年鑑などの参考図書である。研究分野によっては専門の辞書や解説書があり、研究テーマに関する洞察を深める手助けとなる。わたしは辞書、図鑑、地図、全集ものの索引などの参考図書を手の届く範囲内に置くようにしている。

図書館に備え付けの書名、件名、著書名別索引カードは情報源のアンテナとして利用している。出版社や書店が発行する案内目録や書籍の広告も参考になる。情報とアイデアのオアシスは神田や本郷の書店街にもある。

3. 情報の番地

研究が進むにつれて作業の重点は情報集収から情報の分類、整理の問題へと移行する。情報を記録するカードのサイズは大小さまざま、各種の市販品があるが、B6判が適当であろう。

情報は階層分類、つまりカードに番地をつけて、市町村名の区分けを示したファイルに入れる要領で分類する。例えば「古代貿易」のファイルを「貿易品目」「輸送手段」などに分け、「貿易品目」をさらに「金属」「動物」「植物」などの項目に細分する。

情報の分類は問題意識の分化とカードの量の増加に従い、必要に応じて徐々に改善していく。最初から完成した分類法は期待し難い。

わたしは13の角穴のついた情報カードを使用し

た。わりと便利なので使い方を簡単に説明しよう。カード1枚に情報1項目を出典と共に記入し、上欄にそのカードの見出しと番号をつける。類似の見出しを持つカードをまとめてインデックス・カードをつけ、バインダーにとじる。1冊のバインダーにはインデックス・カード5枚とやく百枚のカードを収容する。最初の5ページを目次とし、カードの見出しの一覧表を作る。この方法は情報の索引に重宝である。ただ、バインダーは収納のスペースをとり過ぎるので、現在はファイル・ボックスを併用している。

4. 情報の地図

わたしは記憶力に頼らず、カードに頼るよう努めている。機会あるごとにカードの内容を見て情報を反すうし、情報の比較と情報間の関係について考える。研究の目的は新しい知識を生むことと心得ているが、新しい知識は概念の意外な結合によって生まれる場合が多い。換言すれば情報と情報を今まで考えつかなかった、意表をつく方法で結びつけることにより独創的なアイデアが生まれる。しかしたんに意外な発想だけでは知識とはいえない。常識で考えると意外であるが、その根底には理性と感性の融合した、ある種の必然性が認められなければ新しい知識は生まれない。さもないければ意外性は単に詩人の空想、愚者のもう想に終ってしまう。

わたしは情報の番地を参考にして古代貿易と民族移動の地図を作る作業を続けている。情報の間に新しい道を発見しようと努力している。その発想の源泉はブラック・ボックスの中でも最も暗い、分析の及ばない部分である。

私は専攻が中国古代史で、図書館でよく古典史料を利用します。現在どのようなものを使うかと言いますと、『史記』『漢書』『後漢書』『三国志』『水経』『山海経』『春秋』『資治通鑑』などです。

これらの書物は耳にされたことがあると思いますが、よく書店に並んでいる邦文訳の本では、私にはほとんど役立ちません。どうしてか？ 中国においては一般的に官学とされた儒学が学問の主流とされたため、昔から学者はこれら古典に対する注釈を施し、原典のことばを補い、あるいは評論し、論理の展開を伝統的に行なってきました。現在では古典を研究するには、これら“注”とが“疏”などと言われる原典についての注釈書を参考とし、史料として利用しないでは何もできないという特性があります。

注釈書はひとつの原典に少なくとも数種あり、

それらの注釈書を加味して自分の主張するところへと導いてくるのが、普通行なう方法です。これらの膨大な史料を個人で所有することは現実には不可能ですから、勉強しようと思えば必然的に図書館を利用せざるを得ません。

ところで、では本学の図書館が私の必要とする史料をすべて所有しているかということ中々という状況です。図書館には「学生受入希望図書制度」がありますから、私も度々勉強に必要な本を買って貰っていますが、ただ、台湾や中国本土から取り

寄せるときに時間が掛かるのが難点です。学生時代という期間の限られた間に仕上げねばならない、レポートや卒論等の作成に図書館を利用するので、今後とも史料の充実をお願いしたいと思います。

蔵書を一層 充実してほしい

文学部東洋史学専攻
4年 新 福 重 明

著者からひとこと

アドルフ・ロース (SD選書165)

鹿島出版会〔289.348－L87〕

工学部助教授

伊 藤 哲 夫

アドルフ・ロースという人は、虚飾に満ちた建築が多かった19世紀末に『装飾は罪悪である』という有名な言によって、私達が日々街中で経験する近代建築の成立に大きな影響を及ぼしたオーストリア・ウィーンの建築家です。

ところでそうした装飾を、そして伝統を棄てて成立した近代建築には、画一的で、人間味が少ない、魅力あるものが少ないとも言えるのですが、このロースという建築家がそうしたものをつくった人かということ、そうでな

く、伝統と離れず意味のある装飾を（そうした否定の言にもかかわらず）平気で使用して、豊かな内部空間が展開する素晴らしい建築をつくったのです。

本書はウィーンという都市の文化、精神と関わりながら形成されていったこの建築家の思考を考察したのですが、建築科以外の学生が、ひとつの建築の成立の背後に、どれ程深く広い建築家の思考があり得るのか、是非本書を手懸かりとして知ってもらいたいものです。

レファレンス

図書館では、みなさんからの質問に、資料をもとにしてお答えしています。実際にあった事例を紹介しましょう。

質問 近江聖人について調べたい。

回答 人名には、諱・字・号・通称・敬称等いろいろある。これらの別名から相談をうけたときは、まずその本名を明らかにしなければならない。そこで『日本史人名辞典』（歴史図書社）に付載されている別名索引に部で引いてみると、中江藤樹であることがわかる。中江藤樹は思想の巾の広い巨人であるので研究書もまた多いが、当人の著作をみるには、『藤樹先生全集』（岩波）が便利であろう。

質問 金森徳次郎の書いた「国内法としての条約」（『日本法政学会誌』9巻5号掲載）をみたい。

回答 『日本法政学会誌』は各種雑誌目録をみるが出ていなかった。そこで当館所蔵の金森徳次郎の著作をいくつか調べてみると、『憲法遺言』（学陽書房）の巻末に“金森徳次郎憲法関係主要文献目録”が付載されており、その中に「国内法としての条約 日本法政新誌 9巻5号」とある。これで見ると、利用者の請求してきた『日本法政学

会誌』というのは『日本法政新誌』の間違いであろうと推量された。『日本法政新誌』は昭和10年に創刊された雑誌で、途中何回か改題をしながら、今日の『日本法学』へと連なる雑誌である。『日本法政新誌』は生憎所蔵していないので、発行大学である日大の図書館へ文献複写依頼を出す。まもなく返事があつて、9巻5号には当該論文が載っていないとのこと。次に『日本大学経済学部図書館雑誌目録』を調べてみると、昭和34年にこの雑誌に『総目次（人名索引）』（日本法学会）が刊行されていることが判明した。当館では未所蔵であるところから、電話にて『総目次』の検索を再度依頼する。しかし、そこにも見当たらないとのこと。これで考えると、この論文は『日本法政新誌』に登載されたものではなく、前記文献目録の誤記であろうと思われた。更に可能性のありそうな各種の書誌類を検索してみるが、矢張出てこない。そうこうしている間に、金森徳次郎は国会図書館の初代館長であつたことが思い出された。さつそく国会図書館へ参考依頼をすると、後刻返事があつて、『自治研究』に載っているとの回答を得た。

学生受入希望図書リスト抄

加藤秀俊対談 明治メディア考

中央公論社 昭55〔070.21-Ka86〕

前田宏他編 わいせつ事件裁判例要旨集（刑事資料集3）

高文堂出版社 昭48〔326.098-Ke23-3〕

山梨地方病撲滅協力会 地方病とのたたかい

同会 昭52〔493.16-C43〕

松山幸雄 日本診断

朝日新聞社 1978〔319.1-Ma91〕

特許庁工業所有権法研究会編 知っておきたい特許法

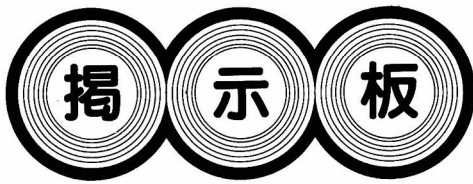
大蔵省印刷局 昭56〔328.5072-Sh92〕

川井健 無効の研究

一粒社 昭54〔324.144-Ka93〕

同刊行会編 極東国際軍事裁判公判記録Ⅰ・Ⅱ

富山房 昭23~24〔329.67-Ky4-1~2〕



図書館運営委員会について

昭和56年度の図書館運営委員会委員は、下記の先生方に委嘱された。

政経学部	教授	矢崎正徳
政経学部Ⅱ部	助教授	速水基夫
体育学部	助教授	中原凱文
工学部	助教授	斎藤忠義
法学部	教授	椿 幸雄
文学部	教授	草野正名
教養部	教授	滝上 勉
短期大学	教授	種子田重彦

本年最初の運営委員会が、6月11日13時より世田谷本校図書館の共同研究室において、各運営委員、図書館側から館長・事務長の外に関係職員4名が参加して開かれた。

図書館長の挨拶の後、例年行われている「学生用図書の推薦」を中心議題として議事が進められた。この「学生用図書の推薦」の趣旨は、図書館にて選択購入している図書では、学生用としては必ずしも十分ではないので、先生方のご協力をお願いして教育に遺漏のないよう緻密な収書を行うためのものである。

会議の結果、推薦限度額は政経学部（大学院、Ⅱ部を含む）575万円、体育学部315万円、工学部340万円、法学部330万円、文学部380万円、教養部350万円、短期大学260万円、合計2,550万円が決定した。なお期限は海外書が10月31日、国内書は57年1月31日までにお願いしたい。推薦に当っては、学生用図書を原則とすること、図書館蔵書

と重複しないもので新書・文庫判・雑誌類以外のものであること。手続きは各運営委員を通じて行なうこと等が決められた。

また委員と図書館側との間で質疑応答が交わされたが、委員より特に本学図書館の現状からできるだけ早い機会に独立の図書館を新築されたい旨の強い要望が出された。

蔵書100万冊の夢

蔵書量は質の面を合わせて考えれば、その大学の知的評価の基礎となりうると言われています。学に志した者をはじめ卒業生にとっても、もてる力量を発揮するためのひとつの保障であると申せます。

本学には、文武両道の精神が脈うっています。

かつて、前総長先生は「蔵書百万冊」の夢を語っておられました。本学が総合大学で、また学部構成も多部門にわたっていることを考えますと、この理想を夢のままにしておいてよいとも思われません。利用者のみみなさんの実感はどうでしょう。

本館の受入実績は下表のとおりですが、この増加ペースでいきますと、目標にはあと三十余年かかることになります。

本館では予算を最大限有効に使うよう努力していますが、理想の早期実現のために、図書館に御理解ある学内外の方のご寄贈をお願いしています。

——昭和55年度 図書・雑誌の受入実績——

図書総受入冊数	和 書	洋 書
20,107	16,828	3,279
雑誌総受入種類数	和雑誌	洋雑誌
2,353	1,923	430

——昭和55年度 図書・雑誌の所蔵状況——

図書全所蔵冊数	和 書	洋 書
307,156	225,837	81,319
雑誌全所蔵種類数	和雑誌	洋雑誌
2,427	1,985	442